

CIEC 第 119 回研究会報告

<https://www.ciec.or.jp/committee/conference/study/entry-1189.html>

【開催概要】

テーマ： 学びの空間としてのラーニングコモンズ II ～図書館の新たな役割とオープン・エデュケーション～

開催日： 2019年6月29日(土) 15:00 - 17:00

会場名： 札幌学院大学 (〒069-8555 北海道江別市文京台 11 番地)

共催： オープンエデュケーション部会

【プログラム】

14:30 - 15:00 受付

15:00 - 15:10 開会の挨拶

15:10 - 15:40

開催趣旨説明

オープン・エデュケーション部会の取組／ラーニングコモンズの現状と課題 (早稲田大学図書館の取組)

武沢 護氏 (早稲田大学大学院/高等学院)

15:40 - 16:10

【講演】 中学高校におけるラーニングコモンズの情報環境整備

横濱 友一氏 (東京・聖徳学園中学高等学校)

16:10 - 16:40

【講演】 北星学園大学ラーニングコモンズの取組みの現状と今後の課題

永井 暁行氏 (北星学園大学)

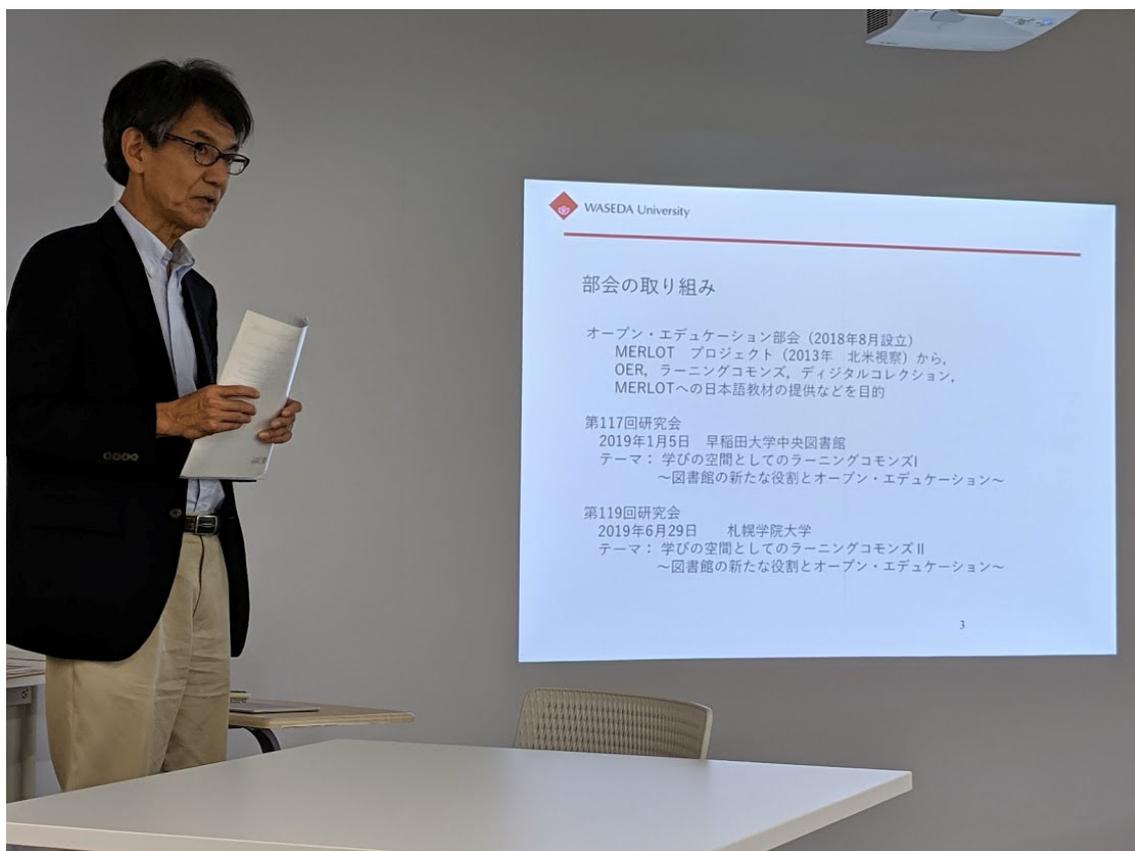
16:40 - 17:00 ディスカッション

17:00 - 閉会の挨拶

【開催報告】

研究会冒頭、早稲田大学大学院／高等学院の武沢護氏より、オープン・エデュケーション部会の取り組みとラーニングコモンズの現状と課題について、開催趣旨説明を兼ねた報告が行われた。

新学習指導要領 (高等学校学習指導要領解説 総合的な探求の時間編) では、学校図書館について言及があり、学校図書館の「学習センター」、「情報センター」としての機能を充実させる、そしてそれに加えて、司書教諭、学校図書館司書等による図書館利用の指導により、生徒が情報を収集、選択、活用する能力を育成することができる、と記されている。



そこで、本研究会の目的を「教育観・学習観の変化から学習環境の変化へ」と位置付けた。その中でも、ラーニング・コモンズについて触れられた。複数の学生が集まり、電子情報・印刷物も含めた多様な情報資源から情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする「場」を提供するものであり、特に同氏が所属する早稲田大学中央図書館内に2019年4月に完成したラーニングコモンズについての紹介がなされた。

ゾーニングの考え方が取り入れられており、Active Area, Quiet Area, Silent Area, Super Silent Area の区画が存在する。人の出入りについては、談議ができる場所のほうが人気があり、一定の支持を得ている一方で、「図書館は静かに活動するべきなのではないのか？」といった声もOBを中心に寄せられているようである。これは、「ラーニング・コモンズ」という概念が広まっていないことに起因すると同氏は述べた。

また、早稲田大学中央図書館の特徴として、キャンパス構内が道路を挟んでいる形となっているが、講義棟とは道路を挟んで反対側に位置しているため、たとえば長期休暇や入試期間であっても在学生に対してロックアウトすることなく、学びの空間を提供することが可能となっている。

プログラムの2つ目は、聖徳学園中学高等学校の横濱友一氏より、学びの空間としてのラーニング・コモンズというタイトルで、2017年4月から運用開始されたラーニング・コ

モンズを中心に、同校での "Learning without Limits" (制限のない教育) について講演をいただいた。同校では、自由だからこそ育まれる、創造性や自主性を尊重し、ラーニング・コミュニティを用いて、生徒個人がやりたいことを最大限やれるような空間を提供している。



たとえば、生徒がノートテイクを行うにしても、これまでのように紙のノートを用いてノートを取る生徒もいれば、iPad を活用したノートテイクを行っている生徒もいる状態が実現している。

同校は、2019年現在中学1年生～高校2年生にBYOD環境としてiPad、貸出用の端末としてMacBook Proを整備、教員にはOne to One iPadを整備している。それらを活かす学習プラットフォームにMetaMoji、G Suite for Educationを利用できるようにしている。生徒に敢えて(教材や資料を)与えるということはずらずに、教員がプリントを配布しないケースの存在や、ICTツールの規制や強要を行うことをすることをせず、学びの空間をWeb上に移行している旨が述べられた。

大人(先生)がスマートフォンやタブレット端末を利用している事項を引き合いに、生徒への制限や規制の是非について定義がなされた。具体的には、大人がスマートフォンやタブレット端末を利用している内容は、「SNS・ゲーム・動画閲覧・漫画・Web閲覧」といった娯楽であり、決して学びのツールではないため、そのようなツールが生徒にとって学びのツールになることを考えることができないと述べた。実際、スライドに提示された写真を見ると、生徒が堂々とスマートフォンを授業中に操作している様子が映し出されたが、この様子こそが教員にとって抵抗のある姿だという。それは、自分たちが娯楽のために使っていることに他ならず、そのような姿を教員が受け止めがたい様子が伺えた。



しかし、生徒に対して興味関心を引き出す課題を提示すれば、ICT ツールを学びのツールとして活用することができることを示した。そのため、教科「情報」については、教員から知識や技能を単に与えるだけのものではなく、示した基準点を乗り越えていてもらいたいと述べた。

大人が学びに活用したことがないツールであるがゆえ、生徒の学習活動そのものをエビデンスとして示すことができないかと考え、同校では iOS デバイスの通信を監視できる MDM (Mobile Device Management) ツールである CISCO 社の mobiconnect CSC を導入した。MDM を制限・管理するものではなく、安心・安全を維持するためのツールと位置付けている。また、この mobiconnect CSC を利用することにより、例えば動画サイトである YouTube を授業利用する際に、関連・推薦動画のサムネイルを非表示にし、現在視聴している動画から興味関心を別の方向に逃がすこと無く学習コンテンツの視聴への集中を促すことが可能となる。

一方で、このツールを利用することで生徒が利用する iPad のプライバシーへの危惧がある。このことについては、保護者が同意した上で、生徒の行動に対して保護者が責任を負うこととなる。単に端末を生徒に与えるだけではリテラシーに繋がる指導はできないため、すべてを与えるのではなく、生徒自身が置かれた状況を考えるきっかけとしている。

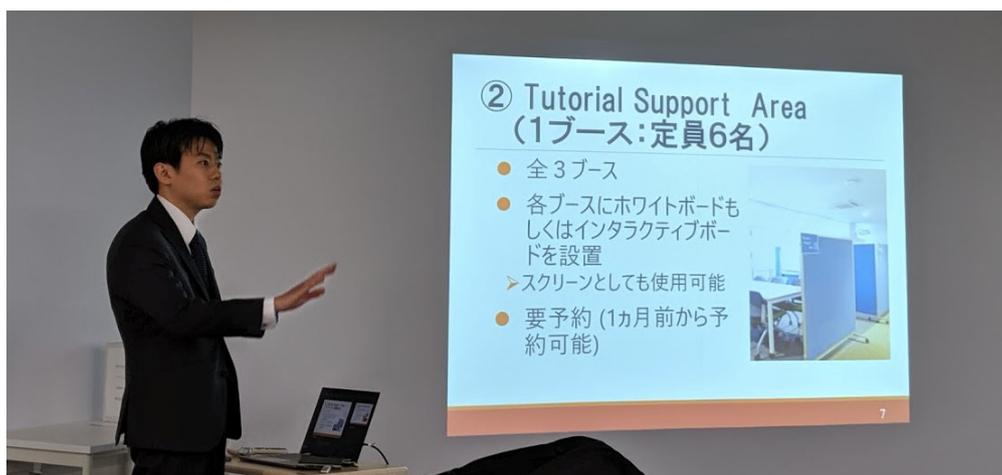
最近では AI の利活用も視野に入れており、同校が導入しているスタディサプリの学習ログを利用して、単元の流れを単純な一方向のパス (ハシゴ型のカリキュラム) として捉えるのではなく、クラスタリングを行い、それぞれの単元に関連をグラフとして与えるようなカリキュラムの構築にも取り組み始めている。生徒個々人の学習履歴をもとに、ネットワーク化したカリキュラムの理解度を推定し、成績向上を効率的に実現する最適なラーニングパスを構築することで、個々に最適なカリキュラムを提供することができると述べた。

ラーニング・コモンズの活用とは別に、対外的な広報で課題も残っており、一見授業崩壊

のように見える生徒の主体性を尊重した学びの姿を同校近隣の住民が外から見た際に、先入観から来るイメージに負けてしまうということであった。

最後にプログラムの 3 つ目として、北星学園大学の永井暁行氏から北星学園大学ラーニング・コモنزの取組みの現状と今後の課題についての講演があった。同大学においても、ラーニング・コモنزにおいて、ゾーニングをしており、次のような区画を定めている。

- Presentation and Seminar Area (完全に仕切りが可能；セミナーも実施可)
- Tutorial Support Area (3 ブース仕切りあり，取り外しも可能)
- Relaxation and Collaboration Area (ソファ席；テーブルに共有モニタもしくはホワイトボードあり)
- Group Session Area (自由に机を動かすことが可能；予約不要)
- Creative Project Area (面積の広い机を設置，大人数でのグループワーク可能；予約不要)
- Print and Copy Area (いわゆるプリンタブース)



同大学では、ラーニング・コモنزは「学生のための学びの空間」として位置付けており、学習に関係のない、たとえばサークル活動や雑談・(単なる) 食事をする場としての利用は認めていない。また、利用は同大学の学生に限られ、教職員の利用も認めておらず、学生からの授業時間外の指導や助言を養成された場合にのみ教職員でも利用可能な場所となっている。

ラーニング・コモنزにおいては、食事の可否は度々議論となることが多いが、同大学では全てのエリアにおいて飲食を可能としている。これは長時間の学習に使える環境を維持するためであると同氏は述べている。なお、飲食可能なもの・不可能なものはきちんと線引きをしている。

運営スタッフについては専任教員 1，専任事務職員 1，非常勤助手（事務職員）1，臨時職員 2 の計 5 名で運用している。それぞれ役割を明確にしており、業務が煩雑にならないような工夫をしている。

また、自主的な学びの支援をすることが、北星ピア・サポーターを含めたラーニング・コモنزの運営スタッフに求められており、授業等で不明な点や、学習する上で困った点について、教員から個別に支援を受けられるような体制を構築している。ただし、強制的な受講をさせることはなく、また、受講回数等を授業の成績や指導の条件にするようなこともないようにしている。支援には、「統計能力の向上（統計アワー）」「日本語ライティング」「数学の基礎（ランチタイム数楽）」「プレゼン・トレーニング」といった内容を用意している。さらに、汎用的なスキルの紹介と体験を行えるような「学習セミナー」も実施しており、大学生活やその後の社会生活で役立つスキルを紹介するような機会も設けている。

学習相談の基本方針として、授業課題の解答等を教えることはせず、助言にとどめるようにしており、学生自身が主体的に課題を解決してもらうように促している。そのため、授業内容に踏み込む支援や専門的な内容については、原則行っていない。

同大学では、利用者数の測定を、人的資源の兼ね合いもあり、定期的な時刻でスタッフが実施している。年を重ねるごとに、日別平均利用者数や学習相談の件数は増えているが、利用者の増加に伴い、支援範囲が多様になっている。また正規授業による指導との線引きや専門的な支援を行う人的資源不足、合理的な配慮を必要とする学生への対応が課題となりつつある。

人的資源の課題について、個別学習支援は、教員の自主的な支援で成り立っており、現行スケジュールであるが故にこの体制が維持できるものの、今後それが維持できるかどうかは不透明な状態である。また、現行スタッフは心理学の専門であるため、専門的な内容の支援となると、支援内容に偏りが生じることも懸念材料となっている。そのため、他部署との連携や、学習支援に対する教職員の理解・協力がこれから一層必要となると纏めた。

講演後、会場大学である札幌学院大学のラーニング・コモنزのコンセプトについての話があり、質疑応答となった。質疑応答では、大学生協との支援の関わり方についての議論やラーニング・コモنزに配置するべきもの（設備）についての議論が交わされた。



(文責：尾崎拓郎，大阪教育大学情報処理センター)